

# 人生を充実させる読書

中條 敏江（前白山市立蕪城小学校校長）

YAのみなさん、読書は好きですか？ まわりの友達も、読書が好きですか？ この冊子を手にしているあなたはとても読書が好きな方に違いありません。あなたは、何のために読書をしていますか？ どんなよいことがありますか？

小学校の頃からあるいはもっと幼少の時から、「本を読みなさい。」「本を読むことは大事だ。」とまわりから言われてきたと思います。なぜ、大人は読書を勧めるのでしょうか。心が豊かになるからとか勉強に役立つからとかいろいろな理由が言われてきたと思います。

固い話ですが、学校教育では発達段階に応じて子どもたちに身に付けてほしい力を育てるために、学習指導要領が定められています。その国語科の中に、中学校では、「読書を通してもの見方や考え方を広げ生活に役立て

自己を向上させようとする態度を育てる」、高校では、「生涯にわたって読書に親しみ、国語の力を向上させ社会生活や人生の充実を図る態度を育てる」と定められています。私は小学校に勤務していましたが、中学校高校生活に向けて、すべての子どもたちに、低学年では読書を楽しみ、中学年では読書の幅を広げ、高学年では読書を通して考えを広めたり深めたりする態度を育てよう努めてきました。先生方は、そんな気持ちでみなさんと向き合ってきたのです。

では、みなさんは読書をすることで、自分の生活や人生がよくなった感覚がありますか？ 60歳を過ぎた今、子どもたちに伝えてきたことが本当にそうだったのか自分の読書生活をふりかえり、感じたことをみなさんにお伝えしたいと思います。

1つ目として、読書習慣は勉強や仕

事にとっても役に立ちました。

文章を速く読むスキルは、特に仕事に役立ちました。一つのことに複数の情報を手に入れ判断して活用していくことは毎日のことでした。複数の資料から正確な情報や重要な押さえどころを読み取ったり、他の資料にない新しい試みだったり貴重な意見を得たりもしました。

みなさんの活躍される時は、今よりさらに玉石混淆<sup>ぎよくせきこんこう</sup>で真偽のわからない情報があふれている筈です。そういった、情報の発信元を確認しながら、資料を読み取り判断していくことが求められます。

かつて、ビル・ゲイツが日本の高校生から「どうしたらあなたのようになれますか。」と聞かれたとき「本を読みなさい。」と答えたそうです。彼は今でも、記憶に残る本としてお薦めの本を紹介しています。彼だけでなく、経営者やクリエイティブな人たちは驚くような読書量だそうです。

読書というと文学を中心に語られる

ことが多いのですが、YA のみなさんに向けた新書が沢山刊行されています。様々な知識を得られ知的好奇心を満足させる新書を楽しみ、是非視野を広げ新しい世界を拓いてください。

2つ目として、私には、読書が夢を与えてくれ人生を豊かにしてくれたとの実感があります。

池上彰と佐藤優の対談をまとめた『大世界史』は昨年ベストセラーになりました。その中で、二人が揃って言うには「世界の中心は中東」だそうです。確かに、民族や宗教のための紛争と難民問題で世界が揺れ、さらにエネルギー資源の産地でもあり、また交通の要衝<sup>ようしゅう</sup>でもあります。日本人にとって、中東は理解しづらい不思議なところであり、古代文明の発祥の地でもあり好奇心の湧くところです。

私も小さい時から関心がありました。小学校の時にツタンカーメン発掘やピラミッドの謎などのシリーズをわくわくして読んだ記憶があり、それらの本の表紙を今でも覚えています。

中学に入りその好奇心は、シュリーマンやロゼッタストーンに移りました。それに類する本をいくつも読み、そのころの夢は考古学者になることでした。

残念ながら考古学者にはなれませんでした。それは趣味となり人生を楽しむことにつながりました。旅行先についての本を読むと楽しさが倍増します。エジプトのピラミッドの変遷も、いくつもの本を読むことで歴史や文化の理解が深まりました。シュリーマンの発掘したトロイ遺跡があるトルコへの旅行では夢を少しだけ実現した気分になりました。それだけでなく読んでいった新書の「オスマン帝国が200年続いたのはゆるい専制にある」の言葉通りのトルコの文化を今でも感じる事ができました。

私の家族も、映画の原作本や映画評を読み何度も楽しんでますし、ボーリングの上達のために本と首っ引きの友だちもいます。普段の何気ない事でも何をするにも前後に本や読み物があ

ると充実すると感じています。

3つ目として、人間そのものの理解ができたことです。実際に人に接してものの考え方や心の動きを知ることはかなわないところもありますが、人には話せないことや自分でも気づかない心の動きは、映画やドラマと並んであるいはそれ以上に読書から学ぶことができました。

中高生の時は、エラリー・クイーンやクロフツ、赤川次郎や松本清張などのミステリーを、大人になってからは西村京太郎や宮部みゆきなどの人気作家の本を沢山読みました。ミステリーは楽しい時間をくれました。楽しいだけでなく、松本清張や宮部みゆきの作品からは人間の思いの深さを感じました。自分はまだまだ至らないと思います。また、西村京太郎や内田康夫の作品からはアイヌや沖縄の差別の歴史や心情について、東野圭吾の作品からは性同一性障害などについて知ることができました。新書で読む内容とは違って、登場人物の感情や

行動を通じて人間をより深く理解することができました。

しかし、大人になって、立花隆の『ぼくはこんな本を読んできた』や佐藤優の『読書の技法』などを読むと、自分の読書歴が薄っぺらなものに感じられました。読書量、本の領域、本の選び方・買い方、本の読み方についても反省が残ります。読書についての本を読むたびに、若い時に読書のしかたの本をもっと読めばよかったと後悔しました。

是非、YAのみなさんには、尊敬する先輩や先生、作家等の読書についての著作を読んでもらうことをお勧めします。その本から示唆を受け、自分の読書の幅を広げ、自分なりの本の読み解き方が身につく、人生の視野が広がることは間違いありません。

私個人の結論ですが、新書とミステリーが中心の私にとってさえ、読書が勉強や仕事、何より自分の人生に果たした役割は大きかったです。そのように読書が人生の質を高め充実させたこ

とは間違いがありません。若い時より退職した今の方が、沢山読書ができるだろうとお思いでしょうが、一概にはそうとは言えません。読書は体力が必要です。若いころの集中力は素晴らしいものです。YAのみなさんには、どんどん多読していただきたいし読書の幅を広げていただきたいと思います。そして、さらに、まわりの友達に読書の楽しさ大切さをお伝えください。



■プロフィール

中條敏江（なかじょうとしえ）

1956年石川県生まれ

図書館の利用を視野に入れた情報教育について積極的に研究をしており、編著に『メディアが身近に感じる情報教育の授業』（明治図書）、他論文等多数ある。

H27年度北信越地区学校図書館研究大会大会実行委員長